

外的視点は特権的な前提なのか？

橋爪大三郎

本誌前号掲載の杉田敦氏の論文「権力分析の「視点」について」は、示唆されるところの多い好篇であった。権力を論じる枠組みを大胆に組みかえない限りもはや展望が開けないともみえる今日、米日の政治学者のあいだでフーコーの試みの可能性がこのように真剣に検討されているのは歓迎すべきことである。

ところで、同論文のなかに私についての言及があり、言語ゲーム論によって法ないし権力を論ずる私の立場が「結局は「視点」(II 権力に対する外的視点)の存在を自明視するところから出発することを選んだ」(二二頁)と規定されている。これは、当然寄せられるコメントのひとつであろうが、私の考えていることとびつたり一致するものではない。そこで、杉田論文に触発されつつ、果たして氏の言うように、権力分析や「社会理論と言語論との関係は……次第に困難の度を増しつつある」(二〇頁)のかどうか、私なりの見解を述べてみよう。

杉田論文はフーコーをめぐるテイラー・コノリー論争を、一つの下敷きとしている。私はこの論争のことも、彼ら両名のこともよく知らない。そこで、杉田氏の論旨が、要点を私流に再構成してみるとつぎのようである：

「フーコーのテーゼ」すべて言説の制度(真理の制度を含む)は、権力の制度であり、権力に効果されている(*)。

「テイラーの指摘」かりにその通りだとすれば、フーコーは、(自分だけが権力の圏外に立ちつつ)メタ理論を立てている(何の権利があつてそうしているのか?)か、あるいは、(自分も権力の圏内に立ちつつ)非真理をのべている(そんな言明のどこに価値があるか?)か、のどちらかである。

「コノリーの指摘」フーコーはそれを承知の上で、あえて、真理の言説によらず「レトリック」を行使しているのだ。

テイラーの指摘が焦点である。なるほど、指摘のように、フーコーはアポリアに見舞われていると見える。しかし、フーコーの仕事を上「テーゼ」のように真理の言説のかたちで理解してしまふことが、そもそも問題なのだ。(*)の「ような事実」は、ありうる。そのことと、それを真理の言説によって表明できることとは別である。後者は無理だ。ゆえに、フーコーの仕事は、真理の言説を回避しつつ(*)の事実を告げんとすることではないか。テイラーの指摘は、その別を混同するとたちまち、真理の言説内部のアポリアが生ずることを確認したにすぎない。アポリアはさしあたりテイラーのものであつて、フーコーのものではない。「両名は「解放」の展望からフーコーを論じようとしたらしいが、杉田氏も言うように、そのこと自体、フーコーに不当である。そしてフーコーは、真理の言説(を保障する視点)を自らに要請したことはない。

さて、杉田氏は、以上の論争と似たような事情が、ハートの法理学ないし言語ゲーム論にも認められるのではないかと示唆する。再び整理してみれば：

「ヴィトゲンシュタインのテーゼ」すべてのふるまい(社会)は、言語ゲームの渦巻きであり、その総体は「外」をもたない。

「言語ゲーム論の仮説」ある言語ゲーム(社会の部分領域)に対しては、言語ゲームをモデルとする経験的な研究(言語ゲーム論)が可能である。

「杉田氏の批判」言語ゲームの外に立つためには、外的視点によるなければならない。言語ゲーム論の仮説は、外的視点の存在を予め自明視するものである。しかし、一般に(たとえばナチスのような悪法の体系に対する)外的視点は、無条件に確保されはしない。

杉田氏は、私(の解釈によるハート)の議論が、任意の言語ゲームに対する外的視点の存在を自明視するものだとしたうえで、そのことの権利を問題とする。「社会理論」という名の「言語ゲーム」と、その「社会理論」が説明の対象としている社会内の諸「言語ゲーム」(例えば「法」という名のゲーム)とが、いかなる関係に立つのかは必ずしも明確でない。両者は同じ「言語ゲーム」でありながら、なぜ前者が後者に対して特権的な地位に立てるのがか依然として不明なのである(二二頁)。この指摘は、やや意外であった。あらゆる言語ゲームに想定される(無数の)外的視点が、超越的な主観の行使する特権的な(唯一の)視点とされているからである。けれども、よく考えてみれば、杉田氏の疑問も無理からぬものである。私がおつきりさせないで済ませていた部分もあるので、氏の疑

問に感謝しつつ、順を追って整理してみるとしよう。

まず、内的視点と外的視点とは、どのようなものだったか。いろいろに言えるが、さしあたりハートによれば、内的視点とは、あるルールに従って行為する者の視点。外的視点とは、自分ではルールに従わない観察者の視点である (Hart [1981:86])。だがここで注意すべきなのは、このふたつの視点を切り離すべきでない、とすぐにハートが念をおしていることである。すなわち、内的視点に外部から言及することもしないような観察者は、ルールを満足に記述することに失敗するであろう、と。外的視点がルールを正当に記述できるのは、内的視点に裏打ちされる場合だけである。

これを逆に言うと、こうなる。ある言語ゲームの内的視点は、その外的視点と(同一人のなかで)矛盾しない。そこで私は、こう考えてみた。ある言語ゲームには、必ず内的視点と外的視点がある。内的視点は、ルールに従う当事者の自然な視点である。それなしに言語ゲームは成り立たない。これに対し、外的視点は、自覚的にだけ採用できるもので、これなしにも言語ゲームは成り立つ。観察者の言明は、外的視点を顕在化させるものだ。(ここで再び、注意。ある言語ゲームの外的視点を表明することは、やはり(もうひとつの)言語ゲームであって、その自然な内的視点に立つことである。だから、言語ゲーム総体の外的視点というものはありえない。[ヴァイトゲンシュタインのテーゼ]参照。)

言うなれば、内的視点はふるまいの視点。外的視点は考える(だ

ここでは内的視点が内閉しようとする運動している。ボクはせっかく外的視点をわがものとしたのに、それを表明する態度を実現するまでにはいたらない。内的陳述の膠着。

ハートによる、法の体系の定式化は明瞭だ。それは、責務を課すルールを底辺とし、承認のルールをセメントのようにして法的ルールをつぎつぎ積み上げた全体である。とすると、そこには、内的視点の最終審級がある。つまり、いくら法的ルールについて考えてみても、ルールの効力をもったまま法の内部にとどまることのできない地点がある。法の理論はそうして、法の体系の外にはみ出してしまふ。一方、考える秩序においては、法の理論は最終審級に位置づく、というわけだ。

法はたしかに自己に拘泥するルールであるが、それは、外的視点を抹消することで支えられているのではない。外的視点をまさに外的視点のままにしておくことで、支えられているのだ。

*

権力分析に際して、視点の問題はたしかに重要だ。しかし、唯一の特権的な視点の存在しないことは、ヴァイトゲンシュタイン・ハート・フーコーらもとも強調したことではなからうか。杉田氏がテイラー・コノリー論争を紹介する手並みを諒しつつも、この論争から言語ゲーム論へと平行関係を設定し、外的視点を特権的に前提しているのではないかと咎める議論に、氏が同調しておられるよ

けの(視点である。(その言語ゲームに従っていないひとの場合、ふるまいは仮想的なものとなる。)どんな言語ゲームにも、外的視点は付随する。それを特権的なものと考えする必要はないし、考えるべきでもない。なぜならその視点に立つには、単に、自分の従っている言語ゲームを反省してみるだけでよいのだから。

*

それでは、杉田氏の懸念を、どのように受け止めたらよいのか。氏は、ナチスのような悪法の体系が、外的視点を許容しないのではないか、という。

まず確認したいのは、ナチスが誰を抹殺しようと、それは外的視点を抹殺するという意味をもたない、ということだ。ナチスも近代絶対主義の政体である以上、各自の内面(考える視点)を直接標的とするわけではない。禁圧の対象となりうるのは、ある言語ゲームの外的視点ではなく、(外的視点を表明するという)もうひとつの言語ゲーム(反抗)のほうである。法的ルールに抵触するあるまいだけが、法的ルールの取締りの対象になるのは、自明のことだ。

けれども一般に、ルールの体系が、外的視点を巧妙に遮蔽することで自己維持をはかる、という戦略をとっていることは、注目してよい。たとえば、こんなやりとりを考えてみよう。

「お母さん、ボクはどうしてお母さんから生まれたの？」

「あら、だって、お父さんから生まれたら、おかしいでしょ。」

うなのはにわかに賛成しかねる。その議論は、ハバーマスにあてはまるかもしれない。だが、「社会理論と言語論との関係」はまだオープンな問題だ。それが「困難の度を増しつつある」のかどうかは人の見通しをうるのにも、まだ沢山の議論を必要とするだろう。

文献

- Hart, H. L. A. 1961 *The Conception of Law*, Oxford U. P.
→1981 Kinokuniya.
- 橋爪大三郎 1985a 『言語ゲームと社会理論』勁草書房。
1985b 「フーコーの微分幾何学」
→1986 『仏教の言説戦略』:38-61.勁草書房。
- 杉田 敦 1986 「フーコー権力論の一断面」『創文』269:6-8。
1987 「権力分析の「視点」について」『創文』279:10-13。

* "External Point of View: A Privileged Assumption?"
by Hashizume Daishuro 1987

(9月号は、社会学の大澤真幸先生です) (たじろぐ・たじろぐ 社会学)

◆新しい社会哲学をめざして——現代自由学芸の騎士

- 今田高俊 自己組織性 社会理論の復活 3500円
井上達夫 共生の作法 会話としての正義 3800円
塩野谷祐一 経済と道徳 現代経済哲学 続刊
川本隆史 現代倫理学の冒険 続刊